

弟と向き合って

中 二

私は健常者だ。毎日元気に過ごしている子供の一人である。しかし、みんながそうとは限らない。現在、世界で十億人以上の人が障害者であるといわれている。日本では約九百六十三万人の人が障害者だそうだ。

私の弟も、口唇口蓋裂という障害のある人だ。口唇口蓋裂を簡単に言えば、生まれつき唇などが割れたままになっている状態のことだ。そのため、弟は三年前に手術を受けた。当時私はこの病気のことをよく知らなかったのだろう。「学校を休んでしばらくゲーム生活だなんてずるい。」とそんな無神経なことを話していたのを覚えている。でも実際はそんな単純な気持ちで入院する人なんて、そうそういないだろう。弟は入院する前、「ご飯がいつもと違う味になってしまうこと」「ママがそばにいないことになること」「動けなくなること」が不安だと教えてくれた。教えてくれたというのは、私たち姉弟が病院内に入れないからだ。病院に

移ってから手術まで暇で仕方なかったという弟に、家での近況報告も兼ねて毎日動画を撮って、メッセージを送り続けた。弟からも一言メッセージのようなものが毎日送られてきた。だから、「不安なんてないんだな。」と思っていた。そんな平凡な日々を過ごしているといつの間にか手術当日。両親から「今日手術だったんだよ。」と告げられたのは学校から帰宅した後だった。私を心配させないためだったのだろうが、不思議と何も感じなかった。「そうなんだ。」とあいづちを打っただけだった。手術は無事成功した。その後、手術が終わってやっと少し話せるようになった弟の、今まで見たこともない弱々しい写真を見せてもらったとき、自分の考えが甘かったことに気が付いた。手足もともに動かせない、ゆっくりできないと話せない、ご飯も食べられない、ゲームもできない等々。よく不安なんてないと思えたものだ。手術の後とはいえ、健常者と障害者の違いを思い知らされた。

弟いわく、退院した後は自由に動けるし好きなものを食べられるから、とても楽しい。とはいえ、全てが食べられるわけではない。家に帰って

からも硬いものや大きいもの、麺類などを食べることは難しく、弟は一か月の間、学校給食が食べられなかった。

この弟の生活を見ていた約二か月で考えたことは、本人と私の考えていることが結構違っているということだ。もちろん私たちは人間だから全てを理解できるわけではない。しかし、当事者であるか否か、障害者か否かによって、考えが少し違うことに気が付いた。当事者（障害者）が実体験を話すことと、当事者でないもの（健常者）が知識として学んだことを話すのでは、話の重みが少し違っていているようなものだろうと思う。

私は生まれてからこのときまでずっと健常者だ。だから、弟の話は妙な納得感がある。別に「健常者の言うことがすべて間違いだ」と言いたいのではない。ただ、健常者だけでは分からないこともある。例えば、足の不自由な人が全員車いすに乗りたいとは限らない。目の不自由な人が全員手を差し伸べてほしいとは限らない。障害のある人が全員誰かに「助けて」と言えるとは限らない。そういうものなのである。だから、健常者は人一倍相手のことを気にかける、そして相手のことを理

解するということが必要だろう。

私がいろいろな話を聞いたり、調べたりして分かったのは、現在の日本ではそれができていない人、とできていない人がいるということだ。相手に話しかけることが苦手だという人や、あれこれ考えすぎて結局機会を逃してしまいう人など、人それぞれだからそう簡単にはいかないと思う。でも、それでいい。少しづつ変えていけば。

私が弟との関わりの中で学んだのは、「人はそれぞれ違う個性をもってしていると理解することが大切だということ」である。きっとそれが健常者が最低限求められるものではないのだろうか。知るだけではない、理解する。勇気を振り絞って相手に助けの手を差し伸べることは悪いことではない。それを理解して実行できてこそ、真の助け合いではないだろうか。